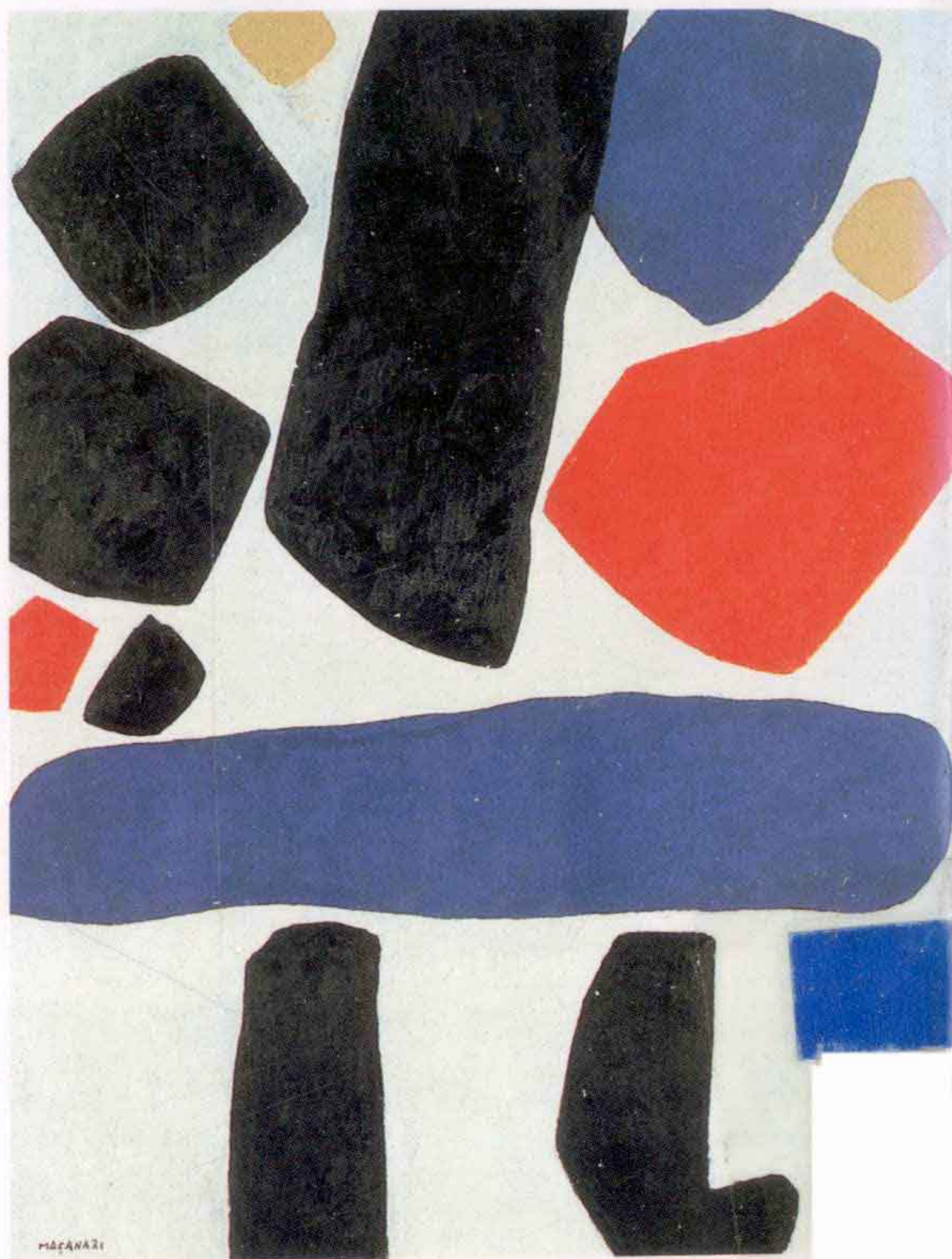


寂庵 まんだら

瀬戸内寂聴



MARAZZI

中公文



中公文庫

じやくあん

寂庵まんだら

定価はカバーに表示してあります。

1997年5月3日印刷

1997年5月18日発行

著者 ^{せ と うちじやくちよう} 瀬戸内寂聴

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Jakucho Setouchi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202850-7 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

寂庵まんだら

瀬戸内寂聴



中央公論社

目次

I おりにふれて

紫式部の家のあたり 12

湖上の明月 16

ロサールの美しい公園 20

女は怖い 23

「山の動く日来る」 27

毒矢のたとえ 31

皇室のおめでた 34

忘れてはならないこと 37

天皇のベッド 41

ひとり生きた女たちの納骨堂 45

アップルパイと煎茶 49

移りゆく世界の足音 54

ダイエツト自慢 58

さくら曼陀羅 62

老人パワー 66

外国からの女客 70

『真夜中の子供たち』 73

雛飾る 77

縁から縁へ 81

春はあけぼの 84

出 発 88

帽子の効用 92

手 紙 97

若さの秘密 101

取越苦勞 105

少数意見 108

リビング・ウイル

濁世の清涼剤 116

スぺロの花祭り 120

夏休みのたのしみ 127

いい前例をつくれ 131

雲仙岳の麓へ 135

ちかごろ迷惑したこと 142

「源氏物語」の魅惑 146

古稀を迎えた年の瀬に思う 149

水のほとり 152

またもや転機 155

歩く 159

若者のまぶしさ 163

実感出来る金の額 166

私は幸福 宇野千代展 169

牡丹 173

桐の花 177

尼僧ブーム 181

谷崎潤一郎賞とセント・クルス 185

リスボンの名月 190

さわやかニュース 195

テレビからの衝撃 199

慰安婦ひとり 203

祈りについて 207

テレビ野次馬 210

もう書かないこのこと 214

宮沢さんの「名」の残し方 218

花と死刑 221

法律はオールマイティか 225

『野性の夜に』 229

木造の校舎 232

野分 235

お座主さすの正月説法 239

桃源郷はここ 243

II ひ と

臘梅とわび助 248

今東光先生と戸津説法 252

いっぴき狼の最期 256

谷崎松子夫人の手紙 260

小田仁二郎の文学碑 264

岡田嘉子さんの死 268

井上光晴さんの死 275

点鬼簿 279

また、惜しい人が 283

死者の気配 286

III 天台寺

三度目の夏の終わり 292

雪の天台寺の正月	296
土仏誕生	300
沙羅の花	305
めぐりあい	309
明月と金色の大屋根	313
ハナ、ハト、マメ、マス	316
無風雪山	320
天台寺の雨	324
摩訶不思議はある	328
月日庵の好日	332
ひぐらし地蔵	336

本文写真

勝山泰佑	／五、六、三〇三、三三五頁
芳賀明夫	／五頁
熊瀬川紀	／二三頁（協力 小学館）
峯岸雅昭	／二九頁（協力 小学館）
胡田俊一	／一六七頁

寂庵まんだら

I

おりにふれて

紫式部の家のあたり

紫式部の生まれ、住んだ邸宅はどのあたりだろうかという興味は、源氏物語の愛読者なら誰もが持つことだろう。

昭和三十三年十一月三日に建てられた武生市の紫式部歌碑に寄せられた谷崎潤一郎氏の文章には、

「残念ながら何分にも古い時代のことなので紫式部その人の個人的事蹟や、行動について、殆ど何も詳しいことは伝はつてゐません。たとへば式部が京都の何所で生れ、何所で暮してゐたかと云ふやうなことは知る由もないのであります」

と書かれている。

その後、数年後に、角田文衛博士が、紫式部の邸宅は、京都市上京区寺町広小路上ル、正確には上京区北之辺町三九七番地にある廬山寺がそれだと考証され、今ではそ

れが定着している。

それまでは『河海抄』の巻第一に、

「旧跡は正親町以南、京極西頬、今東北院向也、此院は上東門院御所の跡也」

という記事が唯一の手掛かりだった。

廬山寺は準門跡寺で、皇室関係の陵墓が寺内の墓地にある。

あまり大きな寺ではないが、何となく品格の高い静かなたたずまいのお寺で、普段はひっそりとしているが、毎年節分の時は、鬼の法楽で知られていて、境内は人で埋まる。

鬼の法楽は、赤、青、黒の三匹の大鬼の縫いぐるみの鬼が踊り出て、それを導師が、豆と福餅を投げつけ追っばらうという寸劇である。鬼たちのユーモラスな動作が面白いので、見物たちは大喜びをする。

三匹の鬼は、人間の貪欲、嫉妬、愚痴の象徴だという。

今、廬山寺では、紫式部邸宅跡として観光を許している。

本堂の裏手に、公卿邸風の家が建っていてその邸は参観が出来る。玄関の右手に廊下がのび、その前に小ぢんまりした庭がひらけている。庭は白砂がしきつめられ、

所々に苔の島がおかれている。島のひとつに自然石が据えられ、新村出博士の揮毫で「紫式部邸宅趾」という文字が刻まれている。

ほとんど樹木はない。平安朝の庭園の「感」^{かんじ}を現したものと、パンフレットには書いてある。

廊下に座り、白い庭を見つめていると、河原町通の方から、町の騒音が潮騒のように伝わってくる。

紫式部のここに住んでいた頃は、このあたりは洛中の外れになっていて、中川のほとりと呼ばれた閑静なところであった。

もちろん、自動車の音など伝わってこなかっただろう。

青い空を見上げていると、この空だけは、紫式部が小説を書くのに疲れて見上げた空と同じだと思えてくる。

このつい数軒北の家の二階に私は昭和二十六年頃、一年ほど下宿していた。小説を書くと呼んで、夫と子供をふりすて、家を飛びだした後のことで、私の生涯で最も暗い季節であった。私は一行の小説も書かず、小説家を夢みて、毎日、この寺の前を通り、荒神橋を渡って、京大の附属病院の小児科研究室に通っていた。そこでシャーレ

や試験管を洗うのが私の仕事であった。もちろん、その頃、私は自分の下宿の近所に
千年前、紫式部が住み源氏物語を書いていたなど、夢にも知らなかった。

〔寂庵こよみ〕一九八九・一〇・一二